千葉大園学報（Tech. Bull. Fac. Hort. Chiba Univ.）
第49号91-97（1995）

わび茶と露地（茶庭）の変遷に関する史的考察

―その9：禁中の茶とその茶庭―

浅野二郎*・仲　隆裕**・藤井英二郎**
（千葉大学名誉教授*・環境植栽学研究室**）

A Historical Consideration on the Changes of Wabicha (Tea Ceremony) and the Roji (Tea Garden) Part 9 : The Tea ceremony and Tea Gardens of an Emperor or an Ex-Emperor

Jiro ASANO*, Takahiro NAKA** and Eijiro FUJII**
(*Emeritus Professor of Chiba University, **Laboratory of Planting Design)

ABSTRACT

A tea-ceremony of Emperor Saga conspicuously received an influence of continent culture, i.e. a ship play was an important element in his tea-ceremony. Thereafter, the manners and customs of this type of tea-ceremony had declined. The style of tea-ceremony and the tea-ceremonial houses and gardens like Shugaku-in detached palace garden designed by Gominoo-in in Edo period, who would have desired the re-establishment of emperial manner and custom, were different from the wabicha's style. In his style, a ship play played an important role in the tea-ceremony like Emperor Saga. The style of tea-ceremony of Gosai-in, prince of Gominoo-in, was in the stream of Gominoo-in, but a ship play was omitted in his tea-ceremony. His style of tea-ceremony, and the tea-ceremonial houses and gardens were same as the wabicha's style of those day's fashion.

1．研究の課題

前報 [5] において筆者らはたとえば『槐記』の中で読み取れる如く，江戸中期，当時盛行した武家や町衆たちの茶の湯のあり方を批判的に見る側面をもった公家・貴族たちの茶とその茶庭に求めた特性について検討した．すなわち，有職故実を軸とした伝統文化の担い手をもって自ら任ずる宮廷人たちが目指した茶の湯の在り方は，東山時代に成立した――江戸時代の人にとっては――古典的ともいえる殿中の茶にその基本を求めるものであった．それ故，彼らの世界における当時のお茶のあり方は，当時流行の茶の湯とは自ずから一線を画した，いわゆる公家・貴族の茶とよばれる体のものであったとした．この論文では公家・貴族たちが直接あるいは間接に奉仕の場としてきた禁裏における茶の湯すなわち禁中の茶とこれに対応するための空間について，現存する事例と文献・資料を手掛かりにしながら検討しようとするものである．

2．梵釈寺の茶

禁裏と茶のかかわりを考える場合，弘仁6年（815）4月の梵釈寺における嵯峨帝の喫茶（この場合，医薬としての飲茶ではない）を忘れるわけにはゆくまい．

『日本後紀』弘仁6年4月22日の条に「幸ニ 近江國滋賀韓埼一．便過ニ 崇福寺一．大僧都永忠．護命法師等．率ニ 衆僧一 奉レ 迎ニ 門外一．皇帝降レ 輿．升レ 堂礼レ 佛．更過ニ 梵釋寺一．停レ 輿賦レ 詩．皇太弟（淳和）及群臣奉レ 和者衆．大僧都永忠手自煎レ 茶奉御．施ニ 御被一．即御レ 船泛レ 湖．國司奏ニ 風俗歌舞一．五位已上并掾以下賜ニ 衣被一．」[12] とある．すなわち，都を出た嵯峨帝の一行は崇福寺の門前で護命法師はじめ衆僧を率いる大僧都・永忠の出迎えを受け，帝は堂に昇りみほとけを礼拝した．帝はさらに，梵釈寺に輿を寄せ，君臣奉和の詩賦のひと時を持った．永忠はこの詩宴に際し帝に手自から茶を煎じ，すすめ奉ったのであった．帝はこれに対し

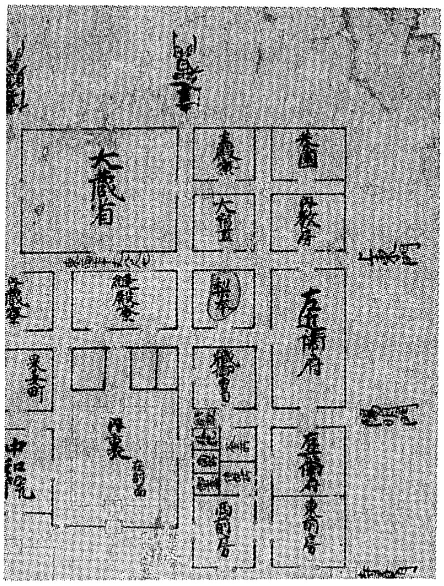
永忠にお召し物を下賜され，嘉賞されたのである．この記録で注目すべきは，以上の記事に「即御レ船泛レ湖．國司奏ニ風俗歌舞一．五位已上并掾以下賜ニ衣被一．(即ち船に御し湖に泛ぶ．国司，風俗歌舞を奏し，五位已上ならびに掾以下に衣被を賜う．)」とある点である．つまり，この嵯峨帝の行幸では詩宴が行われ，舟上での歌舞があり，さらに喫茶のことがあったとされる．もとより，この場合，喫茶のことは一連の行事としてあらかじめ予定されたものではなかったかも知れない．しかし，茶を煎じ奉御することがこの行幸にかかわる催しのひとつとして受容されるための要素を十分に備えていたに違いない．それはこの時期，中国における喫茶の風習が，少なくとも知識としてはすでに禁裏にまで伝えられていたであろうこと．また，永忠が在唐生活およそ30年のなかで喫茶の事を十分に体得し，この行幸に先立つことおよそ10年，あの空海が渡唐した遣唐船が翌年2月帰国する一行とともに帰国していること，などによる．それは村井が指摘するように，平安時代初期の一時期，宮廷貴族の社会で隆盛をみた喫茶の風は，永忠らのような入唐帰朝の僧によってもたらされたものと見られること [17] と深くかかわると見られるからである．

また，このとき湖（ここでは琵琶湖を指す）に舟を泛かべ，風俗歌舞のことがあったことは，かつてこの湖のほとりに営まれたとされる大津宮，そこで営まれた天智朝における宮廷生活と無関係ではあるまい．天智朝は当時，大陸特に朝鮮半島，なかでも百済と深いつながりをもっていたことはよく知られるところであり，さまざまな文化的影響を受けたことは想像に難くない．

『三国史記』によれば，百済・武王39年（638）3月，舟を大池（宮南池か）にうかべ，武王が舟遊したとしている．また中国についてみれば玄宗の営んだ世に著名な華清宮〔天宝年間（742～755）拡張・整備〕には人工的に飾られた湯池がつくられ，王の舟遊に対応したという [10]．

このような古代中国や韓国の文化の流れが，我が国において次第に三船御会とよばれる一種の儀典的な舟遊の形式をつくりあげることになったとみる．

韓崎へのこの行幸において催された詩宴と舟遊の一連の行事のなかでおこなわれた永忠の煎茶奉御のことは嵯峨帝の御意に，まことにかなうものであったと想像される．それは，嵯峨帝によってこの年すなわち弘仁6年6月，近江，丹波，播磨の諸国に茶樹を栽培することが命ぜられた [13] ことによって推測されるであろう．またこの畿内近国に茶樹の栽培が命じられた前後と考えられる時期 [18] [11]，大内裏の東北隅に一町歩の茶園が設けられたのである（第1図参照）．



第1図　大内裏の茶園

（元応元年写「宮城図」部分：陽明文庫蔵）

大内裏（宮城）の東北隅（図の右上）に設けられた一町歩ほどの茶園．嵯峨天皇の唐崎行幸の前後の時期に設置されたと推定される．

すなわち，平安初期，唐風文化の昂揚した嵯峨朝を中心とする弘仁文化の一端をになうものとして，この喫茶の風がやがて大きく位置づけられること――春秋二期に催される季御読経（きのみどきょう）の「引茶（院茶）」――になった点に注目したい．

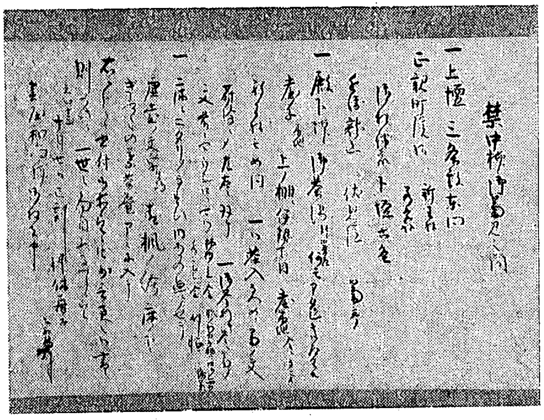
この喫茶の風は，やがて弘仁文化の退潮とともに衰退する．しかし，この弘仁6年の韓崎行幸における茶の奉御は，我が国の喫茶，茶の湯の歴史を考えるうえで，まことに重要であり，また同時に禁裏と茶の湯のかかわりを考えるうえで極めて重要な出来事であったといわねばならない．

3．「茶の湯」献上

鎌倉時代末期，金沢・称名寺の整備に与って力のあった金沢貞顕の書状 [6] によって，貞顕〔弘安元年(1278) ―元弘3年 (1333)〕時代，京や奈良を遠く離れた鎌倉でさえすでに茶を愛好する人びとがかなりの数あったことが知られる．すなわち，鎌倉末期には茶の愛好者が当時の三都つまり京都，奈良，鎌倉を中心として，かなりのひろがりをもつに至っていたとみられる．しかし，この時期，禁裏における茶の事情については，まだ管見に入っていない．禁裏の茶に関する記録が見える比較的早いものに後崇光院の『看聞御記』があり，また『親長卿記』，『実隆公記』などがある．これらの記録のなかで

後花園帝から後柏原帝の時期は主に各地からの禁裏への茶献上，「御茶事あり」，あるいは「十種茶，十炷香あり」などの記事が見えるのみであって，その内容を詳細に知ることはいささか困難である．ただ，『多聞院日記』天正14年（1586）1月20日の条には「金子ノ座敷持テアルク様ニシテ，於内裏茶湯沙汰」[22] とあり，これは黄金の茶室をもって秀吉が前年に引き続き，茶の湯を献上した出来事を伝えるものであろう．

すなわち，天正13年（1585）10月7日，秀吉は正親町天皇に「茶の湯」を献上する．この年，秀吉は天下をほぼ平定し，その政権を確立し，関白を拝任する．「茶の湯」献上は，この御礼の意味を込めたものであったとされる．秀吉は7日午前10時参内，常の御所に祗候し，天皇，皇太子（のちの後陽成天皇），誠仁親王（皇太子および八条宮智仁親王の御父君）より御一献を賜わった．その後，天皇を小御所にお迎えし，秀吉が点茶し，これを献じた．利休はこの茶会の模様を茶会記として春屋和尚に書き送ったと伝えられる [19]．この茶会記によれば，それは上壇三畳敷に天皇，皇太子，親王，また下壇六畳敷に御相伴衆として近衛竜山，伏見院（邦房親王），菊亭晴季が着座しての茶会であった．この茶会では秀吉の御茶湯（すなわち茶頭役）で台子の茶が行われた．このとき床には生嶋虚堂の墨跡と青楓の絵が飾られた（写真1参照）．すなわち，この茶会記から，この献上茶会が禁裏の礼式



「禁中茶会記」（表千家蔵） [19]
天正13年10月7日，秀吉の「茶の湯」献上の模様を伝えた茶会記．（財団法人不審菴提供）

（有職）に意を用いた貴人点（きにんだて）の茶儀であったことがわかる．御三方が還御ののち，端の御座敷を茶席として跡見の茶会がもたれた．この茶席では利休が茶頭役をつとめ，台子茶湯がもたれた．秀吉はこの禁中茶会に引き続き，翌年正月黄金づくりの茶室を禁中に運び，先に触れた如く，再度茶の湯を献上した．

この両度にわたる茶の湯献上が利休をして名実ともに天下一の宗匠としてわび茶の世界にその地歩を確立させた，といえる．

古くは宮中で行われる儀典（俗に御催し，あるいは御もてなし）にあって舟遊が組み込まれるのがひとつの伝統として成立していた．それは例えば足利義満が北山殿に後小松帝を迎えて行った三船御会や，義教が室町殿に後花園帝を迎えて行った三船御会 [24]，またさらに古くは白河帝が西河（大堰川）行幸のみぎりに行われた三船御会など [20] にその例を見ることができる．すなわち，儀典の催行にあたって，舟行を加える御宴が組み込まれるのを有職の伝統（俗にしきたり）としたとみる．しかし天正13年に秀吉が行ったこの御茶の湯献上ではこの有職の伝統を全く無視した茶会であったといえる．このように見るとき，このことは，単に茶の文化のうえのみならず，大きくはわが国の文化の伝統にかかわる問題を含む出来事であったといえる．

4．後水尾院の御茶

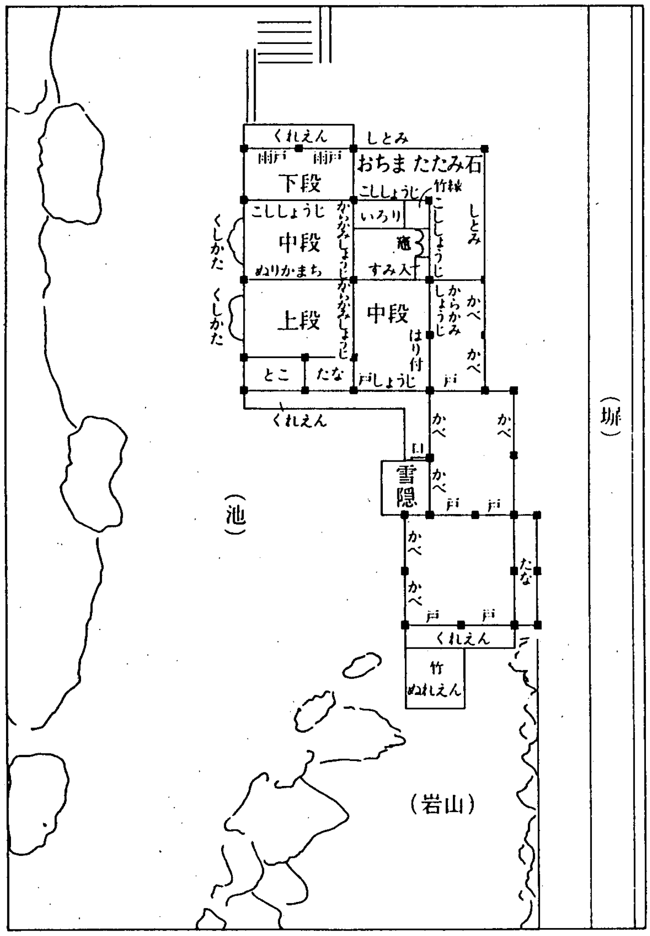
秀吉の「茶の湯」献上ののち，禁裏でもやがてわびの茶の湯が行われる時期を迎えるようになる．しかし江戸初期，さらに厳密にいえば後水尾院の時期までの禁裏における茶は，いささかそのかたちを異にしていた．

(1) 仙洞御所

寛永10年（1633）8月小堀遠州が設計施工を担当した工事がはじまった仙洞の御庭は同13年（1636）4月までには完成したらしく鳳林承章は『隔蓂記』4月18日の条に御庭拝見のくわしい記録を残している [16]．

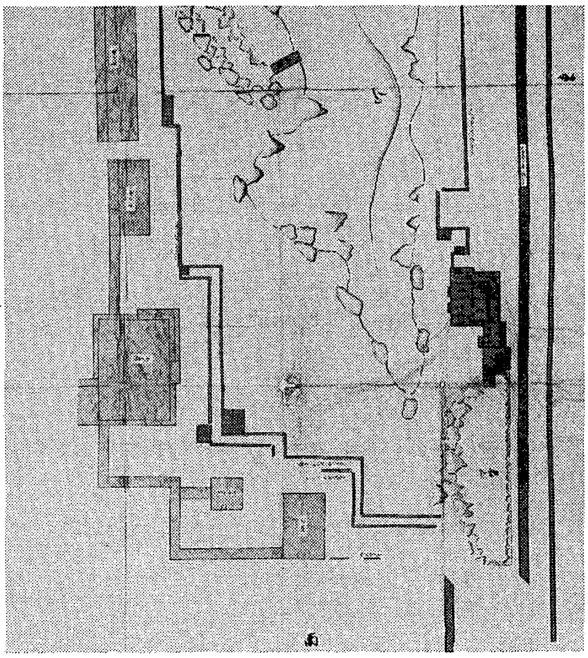
寛永13年9月18日，後水尾院は仙洞御所において口切りの茶会を行った．この茶会の模様は『隔蓂記』によって詳しく知られる．すなわち，当日の客は近衛信尋，妙法院尭然親王ら9名で，振舞があって後，茶室で勧修寺経広が茶頭となり三種の茶が出された．このときの飾りは，「御書院」畳床：三幅一対（牧谿筆　寒山拾得，龍，虎）に銀の三具足，違棚：鴨の香炉，食籠，盆石．「御茶屋」床：癡絶の布袋賛墨跡，棚：染付香炉，古小箱，といった如く，極めて格調の高い書院飾りであり茶室の室礼であった．御茶屋での御宴遊ののち，月の昇る御庭に出て島の山上に設けられた錦座でひと時をすごす．その後，宴席を官船に移し歌謡を楽しみ，庭上にあがって舞踊を観賞ののちおひらきとなった [1]．

寛永20年（1643）3月26日には仙洞御所において鳳林承章が後水尾院に御茶を献進する．承章はこのときの茶会の模様もまた『隔蓂記』に詳しく書き残していて，その内容を知ることができる．すなわち，この日の御相伴



第２図　寛永度後水尾院御所御茶屋平面図 [21]

主室は床・棚を備えた上段六畳と中段六畳で，それぞれに櫛形の窓が池庭に臨むようにして設けられていた．



第３図　寛永度後水尾院御所における池庭と御茶屋・御書院の配置 [7]

池を隔てて建つ御茶屋と御書院とは，舟によってつながれる構成であった．

は聖護院門跡はじめ６人で，まず御茶屋で御膳をたてまつる．ついで御泉水之御舟に乗られ，御舟遊．御舟より御茶屋に成らせられ，御茶を催される．承章は勅命によって茶頭をつとめ，濃茶および薄茶を点てたことを伝えている [2]．このときの御飾は床に亀山院宸翰と鹿苑寺に咲いた藤花の立花であった．

『隔蓂記』にみえるこれらの茶会が行われた御茶屋は失われてしまったが，今に残される絵図面によって，その内容を知ることができる．すなわち，主室は床・棚を備えた上段六畳と中段六畳で，この上段と中段は塗框によって分けられていた．上・中段の西側にはそれぞれ櫛形の窓が池庭に臨むようにして設けられていた．中段六畳に北接する杉拭板敷は下段の間で，中段の間とは腰障子で仕切られ，北側は雨戸で，さらにその北側には榑縁が取り付けられている（第２図参照）．この榑縁の先には船着があり，池を隔てて池に近く建つ御書院と舟でつなぐかたちをとっていたものと見られる．池庭に対するこの御茶屋，御書院の配置については寛永度仙洞女院御所指図によって知ることができる（第３図参照）．

仙洞御所における後水尾帝の茶は御茶屋と池すなわち舟とが巧みに結ばれるなかで展開されたものといえる．それは後水尾院の好み，というよりは徳川幕府の対禁裏政策を強く批判された後水尾院の姿勢，さらにいえば大化改新以来律令格式制度が樹立される中で成立した内裡制にかえるべしとして天皇みずから宸記されたとされる順徳天皇の御撰『禁秘抄』にならぶ『当時年中行事』を勅撰された後水尾院の姿勢 [9] とより深くかかわるものと見たい．そこでは先に触れたあの嵯峨帝の梵釈寺の茶の一連の催しもまた想い描かれていたかも知れない．

(2) 修学院離宮

度重なる江戸方の不遜な措置に，寛永６年（1629）11月８日後水尾帝は突然に譲位される．さらに慶安4年（1651）５月６日落飾，法皇となった．幕府は法皇に対する融和策の一環として離宮造営のことをすすめる．院もまたすでにその計画をもたれていて，その結果ついに修学院の地におそくとも明暦元年（1655）までには離宮造営の工事が開始されるはこびとなり，万治２年（1659）春ごろまでには建築が完成したとされる [15]．この修学院離宮は法皇が理想とする山荘であり，あるべき姿としての池と御茶屋の空間構成を具現するための造営であったと見る．

寛文２年（1662）10月18日，この修学院離宮において法皇は口切の茶事をひらく．客は道晃法親王，曼殊院宮ら4名．御振舞のあと，舟に乗り池を渡って開飛之御亭

に赴き，ここで濃茶を楽しんだのであった [4].

第４図は「修学院図屏風」の一部である．この一隻の屏風は，図の内容から寛文４年（1664）から天和２年（1682）の間の景観を示すものとされる [14]．この屏風絵には下御茶屋と上御茶屋の様子が極彩色で細密に描写されており，上述の茶会をはじめとして，後水尾院がこの離宮を用いられた姿が具体的な絵姿をとおして知ることができ，その意味に限っても，この屏風はまことに貴重といわねばならない．すなわち，上御茶屋の洗詩台には院御自身と思われる法躰の貴人が見え，また浴竜池には万松塢に近く漕ぎ進む船が見え，船上では公家達の酒宴がひらかれている（第4図参照）．さらにまた，この屏風にはいまはない止々斎が描かれており，その構成を検討するうえでも極めて貴重なデータを提供してくれている．

第４図　「修学院図屏風」にみる上御茶屋の様子
（撮影：遠山孝之）
浴龍池・万松塢近くに漕ぎ進む船上では酒宴がひらかれている．

写真　修学院離宮上の御茶屋・浴竜池の現況
右手は西浜，正面は隣雲亭，その左手前に万松烏が広がる現況を示す．

写真は上御茶屋・浴竜池の現況を示す．写真右手は西浜，正面は隣雲亭，その左手前に万松塢がひろがる状況を示す．もとより，この現況は後水尾院の当時とその状況は変わっていること勿論であるが，院がこの離宮庭園に寄せた理想の空間構成，特に御茶屋と池のあるべき姿を考えるよすがとするに足るものであるといえる．

５．後西院の御茶

後西帝は後水尾院の第7皇子，兄君・後光明帝が薨ぜられ後嗣なきため，承応3年（1654），当時17歳だった帝が践祚，２年後の明暦2年（1656）新造成った内裏において即位された．

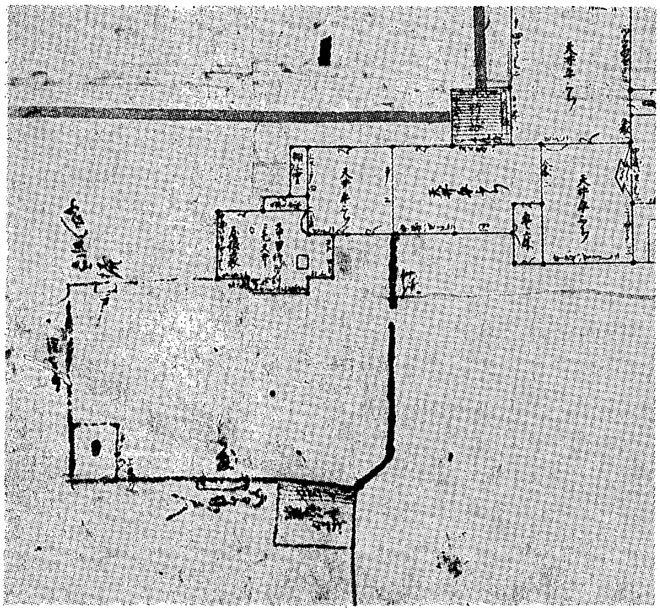
帝は御父・後水尾帝の訓育のもと，万葉をはじめ古今や源氏を究められた．書道は御父君の書風を継がれ，また画技をよくされた．

一方，香道および茶をよくされ，茶道についてみれば，元服の慶安4年（1651）にはすでに自邸に後水尾院らを迎えて茶会を催しうる[3] 域にあった．やがて帝はわずか10年後に帝位を霊元帝にゆずり仙洞に移ることになる．仙洞に移られた後西院の御茶については院の弟君にあたる奈良興福寺一条院門跡の三菩提院宮真敬法親王の筆録になる『後西院御茶之湯記』によって知ることができる．

この茶会記は延宝６年（1678）から貞享2年（1685）までに後西院が院御所の茶室において催された26度におよぶ茶会の明細な記録である．

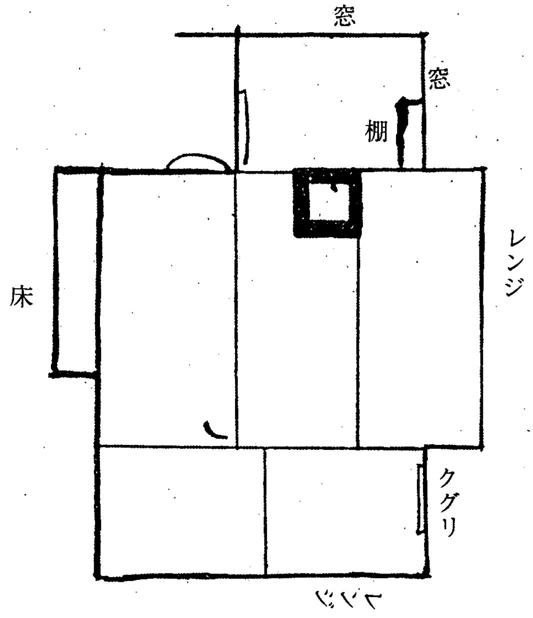
後西院御所（延宝度）は延宝3年（1675）12月上棟式が行なわれ，院はその日新造御所に渡御された．この後西院御所は，延宝８年（1680）女御明子女王が薨去されたためその御殿を取り壊し，跡地に広大な庭園が造られ，数寄屋が建てられた [7] 経緯を持つ．すなわち，『後西院御茶之湯記』にみえる茶室はこの延宝度院御所につくられたものと考えられる．いま，『後西院御茶之湯記』に図示される三畳台目相伴席付・燕庵形式の茶室について，その露地の構成を見ると，ほぼ次のごとくである．すなわち，「延宝度後西院御所指図」（宮内庁書陵部蔵）のほぼ中央（御殿群の最南部）やや西寄りに塀囲いの一郭がみえる．この一郭の北東隅には茶室が建つ．茶室の南前面，囲いの塀には“くぐり”が開けられ，その東につづくようにして外腰掛が配置されている．この図から“くぐりの開けられた囲い塀のうちは，北東隅に建つ茶室のための庭（露地）であろうことが推察される．しかし，この露地の構成についてはその詳細を知ることができない（第5図参照）．

ところで『後西院御茶之湯記』延宝7年（1679）正月25日の条には当日つかわれた三畳台目相伴席付・燕庵形式の茶室が詳細に図示されている（第6図参照）．この図の輪郭と「延宝度後西院御所指図」（第5図）にみえる茶室の輪郭をくらべると，まことによく符合する．このことから指図に描かれた茶室は『後西院御茶之湯記』に描かれた燕庵形式の茶室と判断される．したがって，第5図にみえる塀囲いの空地にはこの茶室に対応する庭として『古田織部正聞書』や『茶譜』に示されるような露地がつくられていた可能性をもつものと推測する．それは，この囲い塀のなかに取り込まれる面積が，そのような露地をつくるに十分な広がりを持つこと，また，『後西院御茶之湯記』の図にはこの茶室の露地側に「窓」（下地窓か），「レンジ」（連地窓）がひらかれている様子が描かれていることに由る（第6図参照）．



第5図　「延宝度後西院御所指図」にみえる茶室と露地 [8]

図の上が北である．三畳台目相伴席付・燕庵形式の茶室の南前面の塀にはくぐりがあり，その東には外腰掛が配されている．塀に囲まれた内側が内露地となる．



第6図　三畳台目相伴席付・燕庵形式の茶室の平面 [23]

『後西院茶之湯記』延宝7年正月25日の条に記される茶室の平面図で，図5に描かれる茶室の平面とよく符号する．

『後西院御茶之湯記』には，この燕庵形式の茶室のほか三畳台目（御小座敷），三畳壁床，三畳台目（如庵形式），四畳半などが記載されている．いま『後西院御茶之湯記』に記された茶の湯の在り方をみると，その多くは茶室から御書院，あるいは御書院から茶室，さらに御鎖間へと展開する茶会であった．その意味で後西院の茶は，『槐記』流にいえば“世間流”の茶の在り方に通じるものといえよう．しかし，その床飾りをみると家隆懐紙，定家懐紙，一休偈，雪舟山林，茂古林墨跡など，まことに格調の高いものが選ばれていて，その限りでは父君・後水尾院に通じる御好みであったとされる．ただしかし，後水尾院の茶の在り方と後西院のそれとをくらべるとき，そこには極めて重要な相違点が存在する．すなわち，それは茶席をかわる際に舟による移動が介在していないことであり，このことは単に舟による移動が省かれたということではなく，後水尾院が帝位をかけて古典の復興を目指した，そのような儀典の重要な意味をもつ内容のひとつを失うことを意味したといってよいであろう．

摘　　要

政治家としてすぐれているだけでなく，弘仁文化と呼ばれる文化活動の主宰者のひとりとして大きな足跡を残した嵯峨天皇と茶の関係について述べた．そこでは大津朝にみられた大陸文化の影響とかかわる舟遊と茶との出会い――帝と茶との出会いについて触れた．平安初期，唐風文化の昂揚した時期に用いられた飲茶の風は，やがて唐風文化の衰退とともに全くその影をひそめる．

鎌倉時代，禅宗の普及と軌を一にするようにして，新たな飲茶の風がひろがる．しかし，この時期，禁裏と茶のかかわりの具体的な姿を知る資料は見いだされていない．やがて，江戸初期，後水尾院の時代，院はすぐれた史観にもとづき，当時流行の世間茶すなわち武家・町衆たち

のなかで広く行われた茶の湯とはいささか異なった茶の湯の在り方を展開する．それは後水尾院仙洞御所においてであり，修学院離宮においてであった．すなわち，儀典のひとつとしての茶宴と舟遊の取り合わせ，その場としての御茶屋と池泉との構成を提示したところに院の茶の著しい特質をみることができる．

後水尾院の第７皇子・後西院もまた茶の湯に通じた．後西院の茶は席飾りにおいて後水尾院と軌を一にしたが，儀典としての舟遊を茶宴の展開のなかから省いたものであった．その故に，その茶の湯の展開の在り方は，当時流行した世間流に通じるものといえる，とした．

引用ならびに参考文献

[1] 赤松俊秀編（1958）：隔蓂記第1，鹿苑寺，京都，33
[2] 同上：459-460
[3] 赤松俊秀編（1960）：隔蓂記第3，鹿苑寺，京都，86
[4] 赤松俊秀編（1964）：隔蓂記第5，鹿苑寺，京都，314
[5] 浅野二郎ほか（1993）：わび茶と露地（茶庭）の変遷に関する史的考察—その8：公家・貴族の茶と茶庭—，千葉大園学報47，157-164
[6] 林屋辰三郎著・村井康彦図版解説（1980）：図録茶道史，淡交社，京都，114
[7] 平井聖編著（1976）：中井家文書の研究第1巻内匠寮本図面篇1，中央公論美術出版，18
[8] 平井聖編著（1978）：中井家文書の研究第3巻内匠寮本図面篇3，中央公論美術出版，23
[9] 猪熊兼繁（1958）：京都御所の伝統（石川忠ほか編，京都御所　所収），213-215
[10] 橿原考古学研究所編（1990）：発掘された古代の園池，学生社，東京，156
[11] 熊倉功夫（1991）：茶の湯の歴史，朝日新聞社，東京，33
[12] 黒板勝美編（1934）：新訂増補国史体系第3巻，国史刊行会，東京，132
[13] 同上，133
[14] 三嶋聡子（1988）：考証「修学院図屏風」，なごみ10，淡交社，43
[15] 森蘊（1954）：修学院離宮の復原的研究（奈良国立文化財研究所学報第2冊），養徳社，奈良，25-26
[16] 森蘊（1974）：小堀遠州，創元社，東京，160
[17] 村井康彦（1986）：茶の文化史，岩波書店，東京，12-13
[18] 同上，30
[19] 永島福太郎（1989）：豊臣秀吉の禁中茶会献上，淡交，43(4)，淡交社，30
[20] 永積安明・島田勇雄校注（1966）：古今著聞集，岩波書店，東京，156
[21] 西　和夫（1984）：数寄なる空間に展開した茶　貴族の茶と座敷（中村昌生責任編集：『茶道聚錦7』所収），小学館，東京，255
[22] 竹内理三編（1985）：増補続史料大成41，臨川書店，京都，5
[23] 谷端昭夫（1983）皇室と茶の湯—『後西院茶之湯記』解題にかえて—資料1.『後西院茶之湯記』（茶道資料館編：昭和58年秋季特別展『茶の湯と掛物III—宸翰—』所収），108
[24] 外山英策（1974）：室町時代庭園史（復刻版），思文閣，京都，519